

LingvoオクトM+

2025年6月9日

(月曜日)

イーグレ姫路

3階セミナー C

○詩

○川柳

○エッセイ・小説

Vol.31



Vol.31
6月9日（月）イーグレ姫路
3階セミナーC
読書会講師：情野千里
高谷和幸
次回7月14日（月曜日）
会場：姫路アイメッセ予定
読書会：講師未定

LingvoオクトM+の
参加は自由です。斬新な作品を募集します。
世話人高谷和幸
〒676-0815 高砂市阿弥陀1-11-24
e-mail takatani_kk@yahoo.co.jp

読書会の1部 高谷和幸・情野千里
村野四郎の詩「鹿」の解釈について、折口信
夫の古代文学、猿楽「鹿の歌」から考察しま
す。 読書会2部 情野千里は「あべの文学」
39号に「白無窮^{しろむくげ}花の家^{いえ}」小説を発表されまし
た。この小説の疑問や創造の苦労などを伺いま
す。
次回の読書会の講師を募集します。

二つの名前

高谷 和幸

へつりとむくりが ひとつだった頃
水面に映る影は 迷うことなく交わって
アヒルとカモは かつて同じ羽を持ち
風のささやきに 互いの名を呼んだ
けれど今、ふたつの異なった名前の系図は
山間を進むひとつの道となり
狭い路に宿場がならび
深い谷間を縫うように続いてゆく
川の水は
緑光をたたえ 静かに流れ
冷たい風が谷から吹き上がる
街道には 見えない旅人の声が
聞こえては 消える
そして、外套と帽子は
亡くした生まれた土地の 田舎の風が懐かしい
異なる国に旅立ってしまったが

心はなおひとつの風景に回帰している
違う駅の名を持ちながら
今日も乗客を運んでいる
今と交わらぬまま
寄り添うもの
別の名を与えられたものが
時に遠く 時に近く
静かに時を刻んでゆく

＊卒業親睦旅行の思い出から
(チャットGTPが制作する)

真剣に

浜田多代子

代掻きが済むと

水門から水が入って

田の水面は鏡となる

微風に面は小さなさざ波となり

白い雲が歪んで映る

緑の苗はなよなよと幼い

太陽が水田を

温い水に変えると

小さな魚たちがやってくる

少しの変化で泥の中に逃げる魚たち

水の底には

大きな頭と尾だけの

オタマジャクシも登場する

足が生え手が生え

尾っぱの無くなつたカエルたちの動きは幼い

ヤゴも

アメンボも

みずすましも

鷺もやってくる

まだ赤ちゃんの田園風景

涼やかな風が吹くと緑の苗たちはささやく
雨だ

しよぼしよぼ降るか どでかく降るか

なあ ほどよく降ってくれ

もっともっと根を張りたい

僕たちの成長を待っている人がいるから
今年も真剣に

おしゃべりな花々

吉田ふみゑ

台所で

ブロッコリーが黄色い星の花を咲かせて

歌っている

濃い茶色の小芋はモシヤモシヤと白い髭を生やして
イビキをかいている

大根は白い十字架の花をつけて
祈っている

庭では

ドクダミの花は

黄色い蕊を包む白い苞が尊くみえる

ユキノシタはぐつと背伸びして

長い花びら二枚と短い花びら五枚を揺らしている

タツナミソウは今年も白い波を起している

オキナグサの花は濃い紫で

やがておじいさんになるの
アケビの花はお母さんが大きくてお父さんは小さいの
そして品良く歌います

あぜ道で

クローバーは

もう詰め草の役も終えて

花輪で生きる

ユウゲシヨウの花は踏みつけられても

怒りもしないでピンク色

今年も忘れずに

【咀嚼】

しろやあきのり

ゆつくりと咀嚼しながら噛める時じゃないと

時間は飛ぶ

疾風怒濤で目眩ぐるしい

映画の場面が切り替わるように

様々な演者が切り替わるように

ゆつくりと咀嚼しながら噛めた時

そういう時がないと

咀嚼していなかったという事もわからないままだ

「暇」

ではない

それはあらゆる物を皮膚という皮膚から迎え入れ
グツグツとマグマのように
燃え滾る熱い以上の熱さで
咀嚼しながら
得てきたそれを
溶かす、味わう、同化する
歓喜のマグマを垂らす垂らす
どこまでも

いにしへの記憶が蘇る
夜まで

継続審議

千田草介

阿耨達池で甲羅干をする亀千匹の重なりのでっぺんに集まって句会をする古今東西南北の神々冗句をとばし崩れ落ちたバベルの塔を東京に浅草の階として再建せんと与太の果てに決議するもさて誰がなんぼ資金を拠出するかで大揉めに揉めて場の空気は陰悪となりバツカスが御神酒をふるまいアメノウズメとヴィーナスがシンクロ裸踊りをして皆の気を和ませんと試みるも甲斐なく審議を次回出雲にて継続せんとのことのみ合意を得て散会す。



最近困ったこと

モス堀渕敬子

私は、高齢者大学のカラオケ部に入っているが、少し困ったことがある。

月に一回カラオケボックスで各自好きな歌を歌うのだが、昨年の11月、私が歌っているときに、他の部員と大きな声でおしゃべりする女性部員がいたのだ。仮にAさんとする。

しばらく我慢したが、我慢できなくなつて、注意したら止めてくれたので、その時は修まった。しかし一ヶ月後の12月、また同じことが起きた。どうしようかと思っていたら、ある男性部員がAさんに注意してくれた。その男性部員は11月に来ていなかったたので、前のことは知らなかったが、見かねたようだ。

2ヶ月続けて同じことが起きたので、1月のことが恐ろしくなつた私は、部長の男性に相談したところ、彼は、1月に、歌う前に部員全員にマナーを守るように言ってくれた。

しかし、その日Aさんは来ていなかった。

2月も彼女は来ていなくて、他の部員の話しによると、声がでなくなつたのでカラオケ部を止めたという。

3月に彼女と直接話す機会があつたのだが、糖尿病で声が出なくなつたという。私も糖尿病だが、声は出ると言っておいたが、まあ、彼女が止めたことで、もめ事もなくこの問題は解決したと思つていた。

ところがこのあいだ、5月の部活で私が歌っているときに、別の女性部員が他の部員と大きな声で

おしゃべりするのだ。それで部長さんが注意してくれたが、私は歌い終わった後その人に「下手くそな歌ですみません。」と言っておいたが、その人から謝罪の言葉はなかった。

私はこのカラオケ部では、一番若いのだが、私が男性部員ならこんなことはされなかっただろうと思うと悲しくなった。

次にされたら「お話し中申し訳ありませんが、話し声が気になって歌に集中できません。」とハッキリ言ってやろうと思う。

もう舐められたくないのだ。

LingvoオクトM+ 読書会テキスト

「円盤の上に立つ鹿」

高谷和幸

鹿

鹿は 森のはずれの
夕日の中に じつと立っていた
彼は知っていた小さい額が狙われているのを
けれども 彼に
どうすることが出来ただろう
彼は すんなり立って
村の方を見ていた
生きる時間が黄金のように光る
彼の棲家である
大きい森の夜を背景にして

村野 四郎（むらの しろう、1901年〈明治34年〉10月7日－1975年〈昭和50年〉3月2日）は、日本
の詩人。日本現代詩人会会長。理研コンツェルン役員〔1〕。長男はセイコー株式会社代表取締役社長
を務めた村野晃一〔2〕。東京北多摩郡多磨村に生まれた。父、兄たちが、それぞれ俳句や短歌を作
るという文学的環境に育った。慶大理財科を卒業したが、詩への情熱は強く、1926年に第一詩集

『罨』を刊行。ドイツ近代詩の影響を受け、モダニストの立場を鮮明にした。頭で考えるのではなく、実際の物に即して考えるという新即物主義にもとづいた『体操詩集』は、人間存在と社会と宇宙の関係をとらえた画期的な詩集。戦後は独自の歩みをつづけ、「不在の神への近接」という実存的な詩境に達した。

村野四郎の詩「鹿」は、一見すると何気ない自然の一場面を切り取った作品のようですが、その背後には孤独、静寂、そして存在の不思議さといったテーマが静かに漂っています。

詩に登場する「鹿」は、読者の心にどこか神秘的な印象を与えます。言葉数は多くないものの、たとえば鹿の「しずかに立っている」姿には、単なる動物描写を超えて、孤高の美や内省的な空気が漂っています。これは、読者自身の存在や生き方を投影させる鏡のようにも感じられます。

また、村野の詩風らしく、無駄な装飾を排した簡潔な表現が、逆に読者に想像の余地を与え、静けさの中に強い詩的エネルギーを宿しています。この「静かさ」が、読む者の内面に深く染み込むような余韻を残し、読むたびに印象が変わってくるのも魅力のひとつです。

まとめ…「鹿」は、村野四郎らしいミニマルで内省的な詩でありながら、読む人に強い印象を与える作品です。鹿の姿を通して、人間の孤独、自然との距離、そして静けさの中にある深い意味を感じさせてくれます。

2行目…「じつと立っていた」

・意味と印象…「じつと」は、動かずに、意志を持って静止している様子を表します。この語には

緊張感、集中、あるいは周囲を警戒しているような印象があります。

・ 鹿の状態…鹿が外界に対して意識を向けており、警戒心を持ちながら立っているような、内に張り詰めた感情を感じさせます。

・ 読者に与える印象…静けさの中にも緊張があり、「なぜ鹿はそこに立っているのか」と、読者に想像させる力を持っています。

9 行目…「すんなり立っていた」

・ 意味と印象…「すんなり」は、形や動きが自然で、無理がなく、滑らかなさまを表します。この語には、抵抗感や緊張感がなく、自然体であるという印象があります。

・ 鹿の状態…鹿がもう周囲に警戒することなく、自然にその場に「いる」だけのような、落ち着いた、調和した姿です。

・ 読者に与える印象…鹿が自然の中に溶け込んでいて、その存在そのものが風景の一部であるような印象を与えます。穏やかで、静寂の美を感じさせます。

違いのまとめ観点

「じつと立っていた」

「すんなり立っていた」

ニュアンス

緊張・集中・意志

自然・調和・無理のなさ

状態

動かずに周囲をうかがっている

自然体で存在している

印象

張りつめた静けさ・警戒心

おだやかで風景と一体となった印象

このように、言葉の選び方ひとつで、鹿の立ち姿が持つ意味や詩全体の空気感が大きく変化しています。村野四郎の言葉の選択の精緻さがよく表れている部分ですね。

SNS

ネットで公開された、学校の授業で行われた生徒の感想を読むと、この二つの言葉の間に、生徒が生きにくい社会が表現されているように思います。現代的ですね。つまり、読み手により、言葉の実感、着地が付与された読みだと言えます。

それを折口信夫が万葉集や古代文学を解釈するときに一番大事にした「実感」であろうかと思いません。

次に高谷が提起したいのは、詩を読むときの時間概念です。上野誠氏（折口信夫研究者）は面白いことを述べています。大学院の指導教官の櫻井満先生が「万葉集」（ここでは派生的に枠を超えて古代文学を考えます）は以下のごとく。

「今すぐ分からなくてもいいんだよ。読んでいけば気づくこともあるよ」との言葉でした。

大事なことをまとめると、文学との出会いは時間概念を超えていて、丸い円盤の上をくるくる回るようなものだということです。分からなくても、円盤の上に居続けたら違う時々での出会いがあると言う意味でしょうか。

次に紹介するのは、歌人の岡井隆氏が、短歌の朗読会で偶然、村野四郎「鹿」という詩を朗読した時の話です。このわたし（話者）は村野四郎の「鹿」は読んで知っていたが、まさかこのような出合いで聞くことになったことに驚きます。そしてもうこの詩を読むことはないと思っていたのに、その思いが覆された。ああ、この詩をわたしは知っている、と思った。このように立っている鹿という動物を、遠い昔に、見たことがあるという記憶。その「鹿」は長い年月を経て、しかも、人の声のなかで再会した。思い出すという行為の中で、詩を読むことの幸福があった。

思い出すために、大事なことは一度、すっかり忘れる必要があり、そのような経緯を経て、「鹿」は私にやってきたのだ。

話題を変えて、千年も昔にあった猿楽の「鹿の歌」を紹介します。

この「鹿の歌」はまさに矢で殺されようとする鹿の歌です。

つまり村野四郎の「鹿」の詩を文として読むのではなく、それは横糸と縦糸で編み上げられたモノ、つまりテキストとして読めば、膨大な情報と集合した無意識の時間を超えた世界がそこに織り込まれていることに気づくでしょう。

長歌（巻16 3885：鹿の歌／乞食者（ほかひ）詠二首その一）

原文（万葉仮名） note.com+llart-tags.net+llameblo.jp+11：

伊刀古名兄乃君 居々而 物尔伊行跡波韓国乃 虎云神乎 生取尔 八頭取持来其皮乎 多々弥尔
刺 八重疊 平群乃山尔四月 与五月間尔 藥獵 仕流時尔足引乃 此片山尔 二立 伊智比何本尔梓
弓 八多婆佐弥 比米加夫良 八多婆左弥完待跡 吾居時尔 佐男鹿乃 来立嘆久頓尔 吾可死 王尔
吾仕牟吾角者 御笠乃波夜詩吾耳者 御墨埜吾目良波 真墨乃鏡吾爪者 御弓之弓波受吾毛等者 御
筆波夜斯吾皮者 御箱皮尔吾完者 御奈麻須波夜志吾伎毛母 御奈麻須波夜之吾美義波 御塩乃波
夜之耆矣奴 吾身一尔七重花佐久 八重花生跡 白賞尼 白賞尼解説鹿の歌（3885番）

乞食者（ほかひ）は猿楽の演者で、鹿を狩る立場の人（大君）に対して、鹿が自らの死後、その身が大君に捧げられ、角や耳、目、爪、毛、皮、肝、肉、胃などがさまざまな用途に用いられる様子を、へりくだった笑いの世界で詠います。最後に自身が花咲くように仕えることを願い、「白賞尼」（読み手）に感謝とご褒美を求めます。

【口語訳】 さあさあ、皆さん。家の中でじっとしていてもつまらないものです。いっそ韓国の

虎と呼ばれる神を生け捕りにして、八頭も捕まえて持ち帰り、その皮を重ねて畳とし、平群の山で、四月と五月の間に葉狩りをしていたときのこと。足を引きずるこの山のふもとに、鹿が現れそうな場所で弓を手にして待っていたところ、一頭の雄鹿がやって来て、こうつぶやきました。

「私はもうすぐ死ぬでしょう。死んだなら、大君のお役に立ちましょう。私の角は、貴人の笠の飾りに。耳は墨壺に。目は澄んだ鏡に。爪は弓の飾りに。毛は筆の材料に。皮は箱の革に。肉は供え物に。肝や胃は塩漬けにして。老いてはいるけれど、この私の体一つでも七重にも八重にも花が咲く（＝役に立つ）と、ほめたたえてください、どうかほめたたえてください。」――

「鹿」はあなたの記憶のどこかにひっそりと立っています。言葉の意味だけに捕らわれず、縦、横の意味コードと時間を超えた文学の世界に忘れられた「鹿」がいるはずです。これが今回の私の言いたかったことです。終わり」

サリー・マンの家族写真

情野千里

1951年生まれの女性カメラマン、サリー・マンの代表作とされるのは、自分の娘を被写体とした『12歳のとき』という作品である。モデルとなった長女ジェシーが、その母同様、強烈な個性をたたえた美人であることから、「サリー・マンの作品は遺伝子レヴェルのナルシズムの産物ではないか」とある写真評論家は疑問を呈している。ただそのような作風を否定するものではなく、彼女の独特な「家族観」を、70年代の空気にインスパイアされた柔らかなヒッピーであるマン自身が理想とする、ヒッピーたちのコミュニティ的イメージであると喝破している。遠く日本の西播磨で、ヒッピー文化とは無縁のまま77歳を迎えた私に孫娘あり。雛乃12歳、柔らかな美人である。

ごちそう花あげるやがて敵となる妹

その人の妻呼ぶ声を聴きに行かな

フェリー乗り場にいる恋に疲れたガザミ

夜這うなり瀬戸内海を路地にして

火となつて水底を這うガザミ

母に似た花だ男が花を摘む

ネコと泳ごう髪を真つ赤に染めて来た

林檎割る防災服は着たままで

2025年3月10日(月)

LingvoオクトM+

3月例会
イーグレひめじ4F③会議室



上記のQR コードでメールアドレスをダウンロードして電子版を送れと明記の上通信ください。PDFをお送りします。